

「千草編 序章（縦書き）」【体験版】です。
内容を省略して紹介しています。

※体験版の為、目次のハイパーリンクは解除してあります。

淫ら純愛 千草編 序章

諸注意

本作品はすべてフィクションです。
実在する地名・人物名・団体名・事件等とは一切の関係はありません。
また、特定の個人・団体・宗教・人種・性別などを誹謗中傷する意図はありません。

物語の一部に、性的表現や暴力的な表現、同性愛（主に女性同士）や近親相姦などの内容も含まれています。苦手な方はご注意ください。

本作品【淫ら純愛 ○○編 序章】は、物語に登場する【逢端壮太】【歩瀨千草】二人の主人公が本編に至るまでの経緯を、其々の主人公の視点から綴っています。

（壮太編と千草編では、登場人物や物語に異なる箇所があります。）

PCからご利用の方はPDF、スマートフォンからご利用の方はHTMLでの閲覧を推奨いたします。

本作品の著作権はサークル「残酷な純真と欲望に弄ばれた愛情館」にあります。

作品の無断転載・改変・配信等の行為はご遠慮ください。

訳あり女学院

私立連理町不埒菜華乃女学院大学。

【生きた人間美術館】がキャッチフレーズの風変わりな美術大学で、通称『連理学院』や『不埒菜女子』などと呼ばれています

その大学の男女共学棟に1年半ほど前から在籍しています。

私、歩瀬千草（あゆせちぐさ）には、やさしくてキレイで格好良くて全てが懂れの、5つ年上のお姉ちゃんが居ます。

美術大学に通いたいと思ったきっかけは、お姉ちゃんが美術大学に通っていたから。

それと、私は子供の頃から絵を描くのが大好きで、幼稚園の頃は背面が真っ白なチラシを見つけたら大喜びで花や人形の絵を描いたり、色鉛筆やクレヨンで着色して遊んだりするほどで、その気持ちは今でも変わらずだったから。

お姉ちゃんは頭が良くて性格も明るく、自分から進んで人の輪に入っていけるため男女問わず友達も多く、周りの友達と刺激し合ったり助け合ったりして名門美術大学を受験して見事に合格。

それに対して、絵を描く以外に何の取柄も無い私には、名門大学を受けられるほどの学力なんてあるはずもなく、競争率の低いちよつと訳ありな連理学院を受けることになんとか合格しました。

『ちよつと訳あり』と言うのは、元々は女子専門学院だったのですが、

現在是在学生の約4割程度が男子生徒だと言う事。

入学案内資料を見る限りでは『男子でも、一定の条件を満たした場合に入学を許可いたします』と、何気にも上から目線な文章や内容ではありませんが、男子の入学希望者も歓迎していました。

元女子学院だけあって、キャンパス内の構造は女子にとって住みやすい造りになっています。

モデルさんや寮生だけに無料解放している温泉施設やエステルームは無かったものと考えても、女子にとってはまるでお姫様になったような造りになっています。

それ故にお行儀の悪い女子も増えて、一事は独占派と共有派に分かれて対立があったそうです。

その事件は公にはされていませんが、お行儀悪い女子にはそれに対する制裁として、学院内で行う様々な授業や行事のモデルをやってもらい、自己顕示欲を満たしてもらおうと言う非常にお節介な「支援と言う名の懲罰制度」を考案しました。

元々は、在学女生徒たちの支援として行っていた制度だったのですが、懲罰としても運用できるようにと見直されて現在に至ります。

その懲罰制度導入をきっかけに学院の在り方を見直し、女子生徒一人一人にIDカードを作成、情報登録と携帯が義務化されました。

このIDカードは、学院内にある特殊な端末を使つてのみ情報を登録・閲覧できる代物で、生徒各人に割り当てられた学院生IDと生徒各人が設定したパスワードで管理。

プライバシー情報の閲覧・更新については、あらかじめ設定しておいた秘密の照合方法でロックを解除。

IDカード内の情報については、例えば学院関係者であっても極一部の教職員以外は、何人たりとも情報の閲覧はできません。

パスワードの紛失、または、秘密の照合方法を忘れた場合、罪が重ければ停学処分にもなるとか。

ただ、このIDカードにも色々と問題があつて、その重大な問題の一つはやはり【男子生徒の情報管理】。

IDカード導入時、関係者の誰もが男子生徒の受け入れを考えていなかったのも、男子生徒を指導したり男子生徒とコミュニケーションを図ったりすることの出来る教職員が居なかったらしいです。

そればかりか、関係者も一部を除いて学院全体が女性と言う、偏った構成になつていたみたいです。

男子生徒もIDカードの携帯は義務とされましたが、そのような理由から、男子生徒に向けた情報管理データベースは作成することが出来ず、男子生徒に向けて作成・配布されたIDカードは名前と数字が彫り刻まれただけの身分証明。

女子が所持するIDカードとは全く質の異なる物になつたそうです。

気になるあの人

『女子・女性なら低学力でも入学できます』と、ちょっと引かかるキヤッチフリーズの大学ですが、どうしても美術大学に進学したい理由があった私は、迷うことなく連理学院の共学棟を選びました。

実際に学院生活を始めると、驚きの連続でした。

私が在席する教室は、男子と女子の割合が半々。

女子は、男子が手を出せないのを良いことに、教室の中で堂々と悪口を言ったり、下品なトークを試してみたり、男子が居る中でも平気で着替えをしたりします。

初めはクラス内の少数女子の傍若無人な行為でしたが、半年も経てば暴動と化していました。

「(女子にはちゃんと更衣室が用意されているんだから、問題になりそうなことは止めてほしいなあ……。) ……はああ……。」

私は男の人が苦手です。

それに、悪口は自分に降りかかってくるから、噂話も含めて口にはしたくありません。

そんな私は誰とも関係を持たず、話の輪にも入らず、暇さえあれば絵を描いていました。

でも、一人だけ気になる男の子がいました。

あいうえお順で名前を並べると、私と前後の関係にある男の子。美術の栗樹先生と仲が良いみたいで、その男の子の前に来ると『あいばくん』と呼んでいました。

（「逢端」って書いて「あいば」って読むんだ…。）

気になるお隣の男の子は【逢端壮太（あいばそうた）】くん。

栗樹先生の授業以外は殆ど口を開かないけど、温かみのある低音ボイスで口調は穏やか。

落ち着いた雰囲気で、ちゃんとご飯食べているのかな？って思うくらい、腕はほっそりしています。

顎の下を人差し指で搔くことや後頭部を搔く癖があって、ちょっとタレ目で、頼りなげな感じ。

（雰囲気がちよっとだけ、チコちゃんに似ているかも…♪）

休み時間は、パズルを黙々と解いていて…他の男子と違って、女の子達を視線で追ったりしない。

男の子が好きなのかな？って思うほど、女の子には無関心。だけど、男の子友達が居る雰囲気もない。

多分、彼女はいない…と思う。
いてほしくない。

『逢端くんの彼女』……かあ……。どんな女の子がタイプなのかな……。)

スタイルのいい人かなあ……。

やっぱり、顔なのかなあ……。

それとも、おっぱいで判断する人なのかなあ……。

エッチな女の子は嫌いかなあ……。

もしかして、占いや運命の人を信じるタイプなのかな……。

お料理……お裁縫好き……収納上手……器量よし……おしとやか……フレンドリー……
 ……e t c ……e t c ……

逢端くんの隣に立つ女性像をイメージしてスケッチブックにペンを走らせませす。

(内面重視か外見重視かだけでも好みのタイプがわかればなあ……。)

周りには一切目を呉れずにパズルを真剣に考えている逢端くん。

そんな逢端くんの隣で、スケッチブックを開いて「逢端くんの好みのタイプ」を妄想している私です。

勝手な妄想を膨らませて、逢端くんの隣にいる女性に私を当てはめて……。デートから始まり、食事……。一緒にお片付け……。挙句の果てには、ピロートークをしているシーンまで……。

「はうう…。」

「ん？」

（あっ、声出ちゃった…。）

すぐ横に妄想の主人公【逢端壮太くん】が座っているのに私の妄想は熱愛の未来に向けて暴走し続け、恥ずかしさと幸福感に思わず声を漏らしてしまい、慌てて両手で口元を塞ぎます。

横でパズルを解いていた逢端くんも私の声にこちらを振り向き、偶然にも目と目が合ってしまった。

「は…うう…。」

「…えっ…？」

逢端くんと目を合わせた直後、さっきまで膨らませていた甘い妄想が脳裏に蘇ってきて…逢端くんを強く意識すると、綿棒の先で敏感部をちよんと突つかれたように、アソコがきゅんっと反応します。

そのたびに、膣の辺りに違和感が生じてきて、ナプキンを分泌液でびっしりと濡らしていました。

（うう…。こんな身体にさせたのは、あの人たちとお父さんの所為だからね…っ。んんーっ…。）

連理学院入学当初から気になっていて、いつも私の隣に座っている逢端くん。

その気になれば、いつでも言葉を交わせる距離なのに…。前進できない大きな理由は、この体質にありました。

【年齢Ⅱ彼氏いない歴】の私には、当然のように男性と性交の経験はありません。

シスコンと間違えられるほどお姉ちゃんのが大好きで、少しでも長くお姉ちゃんと居たくて、気が付いたら毎日お姉ちゃんのことばかり考えるようになっていき、男の人を意識したことさえありませんでした。

そんな私が男の人を意識するようになったきっかけは、お父さんの都合で男性の前に出るようになってから。

私が高校にあがるまでは、お母さんは日中の仕事に就いていました。

その頃は、家事全般や社会勉強という名目でお父さんが家に連れてくる職場の同僚さんに、お膳を出したり片付けをしたり、たまには料理を手伝ったりもしていました。

でも、私が高校に入学してからは、お母さんは深夜の帰宅や出張が増えて、忙しい時は最長で1週間も家に戻らない日も…。

そうになると、お父さんが家に連れてくる職場の同僚さんの接待は私の役目になります。

中学生時代に連れてきた職場の同僚さんは、顔なじみの人たちばかりで、クセもなく、私のことを『千草ちゃん』と呼んでくれるほど親しくしてくれる人もいましたが……。

高校生に上がると、お父さんの職場で人事異動があつて、お父さんも部署が変わり、家に連れてくる人たちの層もガラリと変わりました。

その人たちが私には苦手なタイプで、『挨拶』と託けては抱き着いたり、体をベタベタと触ってきたりしてくるような人たちばかりになりました。

私が連理学院に通い始めて1年経った今でも、その類の人たちを家に招いては、セクハラまがいの挨拶をほぼ毎日のようにされています。

異常な体質に加えて、私の男性が苦手な理由については、実は、お姉ちゃんが家に連れてきたお友達に原因があります。

異性のお友達も多かったお姉ちゃんは、卒業後も接触のある美術大学時代からの異性のお友達も何名か居て、そのお友達がお姉ちゃんの弱みに付け込んで無理難題な条件を突き付けてきた時がありました。

その時の交換条件として私がお姉ちゃんの身代わりに呼び出されて、男性数名の見ている中でヌードモデルを強要され、他にも性的な嫌がらせを受けました。

それがきつかけで、男性に関心を持つより先に恐怖を植え付けられ、その時浴びせられた言葉が原因で、男の人の気持ち余計わからなくなつて、自分にも自信が持てなくなつてしまいました。

それからは、お姉ちゃんがオフの日で一緒に買い物している時でも、男

性の笑い声を聞くと震えが止まらなくなったり、男性の店員さんには近づけなくなったり、レジの店員さんが男性しかいない場合は買物物を諦める様になりました。

お姉ちゃんはそんな私を見て、私を巻き込んでしまったあの日の出来事を深く後悔し強い責任を感じて『恋愛までは進まなくても、男の子には興味を持ってもらいたい』と積極的にドラマを勧めて来たり、少コミなどの若年者向けの恋愛漫画や、男性俳優の載っている雑誌のページを見せたりするようになりました。

でも、お姉ちゃんが招いた事件だったのかもしれないけれど、お姉ちゃんだって被害者です。

お姉ちゃんを酷い目に遭わせたあの人たちは許せない。

けれど、そんな事よりも、早くお姉ちゃんを安心させたくて、大好きなお姉ちゃんに笑顔になってもらいたくて、自分なりに男性の克服する方法を探していました。

そんな時、私に気になる人が出来ました。

それが、同じ連理学院に通い、毎日、隣同士で着席している【逢端壮太くん】でした。

覚悟

放課後、逢端くんを誘って歩瀬の家に向かいます。

連理学院から歩瀬邸までは徒歩で約30分。

自転車ならすぐに到着する距離なのかもしれないけど、私は歩瀬家にとって不要な存在。

そんな私には、自転車なんて高価な代物は与えてもらえません。

生みの親から私に与えられた権利は、『学業を修了するまでは歩瀬邸に住まわせてもらえる』ことでした。

その権利を維持するための約束事には『お小遣いは1ヶ月に1回。上限は1000円。前借は許可しない。』の他に、『高校生に上がった後でバイトしていない場合は、家事全般・お父さんのお友達の接待は私が行う』『自分の体を売る以外のバイトは認めない』など、年齢や人格を無視したものであり…。

当然、私には活きた選択権はなく、歩瀬と私の間に結ばれた【闇の掟】に従うしかありませんでした。

そんな私を見るに見かねたお姉ちゃんは『ちぐに自転車を買ってあげる』と、貴重なバイト代で私の自転車まで買うつもりでいました。

でも、現在、お姉ちゃんのお小遣いの半分以上は、私の為に使われています。

洋服、下着、アウトドアファッション、文具、小物入れ、カバン、生理用品…携帯電話の使用代金、そして、お小遣いまで…。

「そこまでお姉ちゃんの時間とバイト代を奪っている状態なのに、これ以上、お姉ちゃんへの負担はかけられません。」

「大学に上がった今なら、その気になればバイトをすることは可能です。」

「又ードモデルをした時のトラウマがあって、体を売るバイトに恐怖はあるけれど、お姉ちゃんの負担が軽くなるなら私はそれも覚悟していました。でも、お姉ちゃんからは『お金を稼ぐ目的の為にだけに自分を安売りしない事。』」

「元締めには振り回されちゃダメ。」と、夢や目的がない状態での体を売るバイトは固く禁止されていました。」

「女の子の家に、男の俺がお邪魔しても大丈夫なの？」

「平日は、20時過ぎないと誰も帰ってこないから。」

「20時？ってことは、歩瀬さんが晩御飯作るの？」

「うん。帰宅したら、まず、掃除して、買い出しして、ご飯の支度をして……………」

「えっ？じゃあ、自分の時間は？」

「ん？」

「歩瀬さん自身の自由時間だよ。」

「家事の合間と、就寝前…かな。」

「まさか、それだけ!？」

「……………(コクンッ)」

「……………そっか…。」

「……………」

帰り道…

話はそので途切れて、なんとなく重たい空気のまま歩瀬の家に到着します。

歩瀬の家につくと、私の部屋に逢端くんを招きました。

「逢端くん、ごめんね。掃除だけ簡単に済ませてきていいかな？」

「俺のことは気にしないで、歩瀬さんが落ち着くまで待っているから。心置きなく、どうぞ。」

「あ…あの、ホントに、ごめんね。」

「気にしない、気にしない。」

気不味い空気のまま、何の埋め合わせもできないまま逢端くんを部屋に招き、あまつさえ、逢端くんをほったらかしにして家事に取り掛かる私…。

でも、逢端くんは、そんな私にやさしく微笑んで返してくれました。

「はううう……（ソウタくん、好き過ぎるよ…）」

逢端くんに深々と頭を下げて、部屋を出て行きます。

部屋の掃除は毎日のようにしているので、今日はローラーで簡単にホコリ取り。

お風呂の掃除を済ませて、ご飯を炊いて、おかずは有り合わせで済ませます。

「ソウタクンを待たせるわけにはいかない！」

大急ぎでいつもの家事をこなし、部屋に戻ります。

ガチャ：とドアを開け、私が謝ろうとした時、逢端くんの声が聞こえてきました。

「ごめ…」「お疲れさま、歩瀬さん。」

「えっ…あっ…。」

「ひと段落、着いた？」

「えっと…：う、うん…。」

いつもの仕事を大幅に省いたとは言っても、30分は経過しようとしていました。

そんなにお待たせしてしまったのに、イヤな顔どころか、笑顔と労いの言葉で私を迎えてくれた逢端くん。

「長い間お待たせした上に、気が利かなくて、ホントにごめんなさい。」

台所から運んできたインスタントコーヒーを逢端くん差し出し、ポツキーンと挿したグラスをテーブル中央に置きます。

「気を遣わせてごめんね。大丈夫、俺は気にしてないよ。歩瀬さんの私生活の一面を知ることが出来たし。」

「私生活の一面って…。私、まだ、何もしてないと…思うけど…。」

逢端くんの言葉の意味が理解できずキョトンとすると、再び、逢端くんは笑顔で返します。

「手を抜かないで、真面目で一生懸命なトコ。」

「えっ…?」

「学院内で見える歩瀬さんと、私生活の歩瀬さん、俺のイメージと違っていたら残念だなあって思ってたけど…イメージ通りだった。」

「ほっ（良かったあ…）。」

笑顔の逢端くんを見てみると、私の表情も自然と綻んできます。

私を見てもらうために逢端くんを歩瀬の家に招いたので、ここまでの私の評価が逢端くんのイメージ通りであることはとても嬉しい。

ここで何もしなければ、逢端くんからの評価もイメージ通りで終われる。でも、欲張りな私は、逢端くんとのこの先の関係も築きたいし、卒業後もずっと傍に居たい…。

「んぐ…んぐ…んぐ……………ぶはあ…。」

「ん?」

カップに入ったコーヒを一気に飲み干したあと、目を瞑り、深呼吸をして気持ちを整理します。

「逢端…くん…。」

「ん？えっ！？…あ、歩瀬さんっ、何を…！？」

ブラウスのボタンを外して、前のボタンを胸の辺りまで開けた時、逢端くんは両手で私の腕を掴み、慌てた声を上げて私は制止させられました。

「ちよっ、ちよっと待って…！何してるの！？」

「えっ？何って…。逢端くんにはダカを見せるって約束したから…。」

「そこに行く前に、歩瀬さんのことちゃんと聞かせてよ。いきなり脱ぐのはナシ、ナシ。」

いつもは落ち着いている逢端くんが、顔を真っ赤にして私の腕をがっしりと押さえています。

そんな逢端くんの表情を見て、私も恥ずかしくなってきました。

「でも、実際に見てもらった方が言葉で伝えるよりもわかってくれるかなって思っ…。…それに、逢端くんを家に誘ったのは体を視てもらうためだし…。」

「それでもっ！ちよっと待って。順序があるでしょ。俺は、歩瀬さんの家

庭事情を聞いた上で、歩瀬さんと向かい合いたいって思っているんだ。」

「だけど…私、母にはこういう風に躰られたから…。」

「えっ、そんな躰を受けていたの！？男の前で積極的に裸になれって！？」

逢端くんは声を荒げて押し迫ってきます。

私は、逢端くんの熱の入った言葉にたじろぎ、思わず視線を下に逸らし
ました。

「そんなのじゃ…ない、けど…。『アンタにはでっかいチチ以外何の魅力も
ないんだから、男をモノにしたかったらその肉の塊をうまく利用しなさい。
チチ見せればあんたが大体どんな子なのか相手もわかってくれるから』っ
て。」

「それは躰とは言わない。相手にしてみれば性的アピールだよ。そんなの
実の娘に対して言う言葉じゃないし、させる行為じゃない。それに、俺は
そんなことされても嬉しくない。」

逢端くんは真剣なまなざしで私の顔を見つめます。

私は、逢端くんの厳しく熱のこもった言葉にショックを受けて、金縛り
をかけられたかのように、逢端くんから目が離せなくなりました。

「もしかして、おじさんやお姉さんからも性的サービスのような躰をされ
ているの？」

「お父さんには、毎晩、職場の同僚さんの接待をさせられているの…。で

「も、お姉ちゃんだけは、絶対、私にそういう事をさせたり傷つくことを言ったりしない。」

今日に至るまで、お姉ちゃんと私についての話は幾度となく壮太くんにお話ししていました。

私が【歩瀬の家】に居られるのは、お姉ちゃんが残っていてくれて、お姉ちゃんとの協力があつたから。

私が家族と呼べるのはお姉ちゃんだけで、お姉ちゃんには私にとっては家族であり、お姉ちゃんであり、私の【育ての母親】なんだと言うことも……。

「歩瀬さんからお姉さんの話を聞いた限りでは、卑猥な躰をするようなイメージが全くなかったから安心はしていた。けど……おじさんからは接待の強要か……。」

「接待も、元々はお母さんからの言い付けなの……。」

「そっかあ。おばさんが歩瀬さんを苦しめる元凶なのか……。家族の中で唯一の理解者はお姉さんだけ……か。」

「理解者って言うより、私が家族と呼べるのはお姉ちゃんだけ……。私は、お父さんとお母さんのことは家族とは思ってない。」

「でも、親なんだよね？」

「私を生んでくれたことは感謝してる。でも、それだけ。あとは、お姉ちゃんが生んでくれたから今の私が居るんだもん。」

「歩瀬さん……。」

「……………」

逢端くんが私を呼ぶときには、必ずあの言葉がついてくる。

当たり前だと分かっているのに、逢端くんに言われると拒絶してしまう自分が居る。

以前は気にしたことなんてなかったのに、逢端くんとの距離が近くなってきた、逢端くんにもっと歩み寄りたい…私を知ってほしい…と思うと、あの言葉に強い嫌悪感を覚えます。

「お願い、その名前で呼ばないで…。」

「名前？」

「【歩瀬】って名前。…逢端くんには、その名前で呼んでほしくないの…。」

「わかった。そのかわり、ちゃんと話してくれるかな？その…千草…ちゃんのこと。」

抵抗を失くした私の腕を逢端くんに静かに下ろされて、洋服も元通りに直されました。

「うん。ちゃんと、話すから…。」

「約束だよ。ちゃんと話してくれなかったら、また、あの名前で呼ぶからね。」

逢端くんは、小指を立てて右手を私の前に突き出しました。

私に真っ直ぐに向けられた逢端くんの小指。

その小指には、逢端くんの意思の強さとやさしさを感じました。

「はうう…。わかり、ました…。」

突き出された右手の小指に、私も右手の小指を絡めます。

逢端くんと交わす約束に少し不安はありましたが、逢端くんが向き合ってくれているのに逃げようとする自分は許せなくて…。

そう思うと、私のすべてを打ち明けようと覚悟しました。

……………だから、もっとあなたに寄り添ってもいいですか…？

契りを交わした小指を解いて、行き所を探して宙に浮いている逢端くんの手を、私は名残惜しい気持ちで見つめていました。

やがて、行く宛てを見つけると揺りかごにゆらゆらと揺らされているかのように、ゆっくりと私から遠のいていきます。

そんな壮太くんの手に、追いつがる様に両手を伸ばし挟み込み、私の方へと引き寄せて膝の上に乗せました。

「千草ちゃん？」

「あの…やっぱり、『ちゃん』はナシで…【千草】って呼んでほしいの。それと…もう一つ、お願い、あるの。」

「どんなお願い？」

「あい……あっ、あなたの……こと……【壮太くん】って呼んでも……良い？」

恋人と認め合ったわけでもないのに【歩瀬】と呼んでほしくない私のわがままから【千草】と呼んでもらうことを要求して、あまつさえ、逢端くんのことを【壮太くん】と呼びたいだなんて図々しいにも程があるのでは……と緊張に言葉が詰まってしまいます。

「俺は、自分の名前に愛着も嫌悪感もないけど……。でも、まだ俺のことを恋人として認めてないんだよね？そんな状態で千草……は、俺との距離を詰めても大丈夫なの？」

「私は、あなたしか居ないの。寧ろ、私があなたに認めてもらおう立場だから……。」

「千草……可愛い。」

壮太くんは、私の首の下を指先でコシヨコシヨとくすぐって来ます。

「はう……んっ。」

「お互いに恋人として惹き付けられているんだし、もう、千草……一人で気を張り詰めるなんてことしないでさ。」

「はううう……。」

「俺は、千草を猛烈に愛したい。」

壮太くんは、チュツと頬にキスをします。

甘く、くすぐったい唇の感触が伝わります。

「んっ、あ…あとね、もう一つ。」

「ん？」

膝の上に手の甲を上に向けて私の左手、その上に壮太くんの手、更に、
壮太くんの手の上に私の右手の掌を乗せました。

下に向けている壮太くんの掌を右手でクルリと表にして、壮太くんの指
をなぞったり、摘まんんだり、指先で挟んだり…。

壮太くんも、じゃれてくる私の指に指を絡めてきます。

「こおら。本題から外れているぞ。」

「はうう…。だって…。」

笑顔で叱る壮太くん。

しかし、その表情や口調からは拒絶や嫌悪などの負の感情は感じません。
それどころか、壮太くん自身も私の指や指先を積極的に責めたり絡ませ
たりしてきます。

「甘えん坊だなあ、千草は。こんなに積極的で…。」

「私が壮太くんを好きなのは、ずっと前からだもん…。」

「そっか。気が付けなくて、申し訳ない。」

指先で押したらそっと押し返して、擦り寄れば少し強めに擦り寄せあい……。指を絡めると、その指を解かれて…今度は、壮太くんから私の指の付け根まで深く絡めてきます。

そのやり取りはまるで、濡れ事をしている情景のようでした。

「それで、さっきの話だけ…。千草は俺に何がお望み？」

私の頬に、壮太くんの左手がそっと添えられます。

壮太くんの指先から伝わる熱と、私に向けられている真つ直ぐな視線に身体が温かくなって、下半身からは、じわあーっ分泌液が溢れてきました。

そのまなざしは、連理学院で私と話をしている時に向けられるものよりも、温かくてやさしいものでした。

「壮太くんに…寄り添っても…いい？…だめ、かな…？」

「ったく。…しようがないなあ。」

壮太くんは戯れ合っていた右手を引っ込めて、その手で私の右肩を掴み強引に抱き寄せます。

壮太くんの胸に抱き寄せられると、壮太くんへのわがままな妄想が悶々と浮かんできました。

「こんな近くに居たら、俺がどんな気を起こしても、何をされても文句は

耳元で夢の中に誘う様な、やさしくて甘い声で囁いてくる壮太くん。

右肩は彼の右手に捕らえられて、押し退けるほどの隙間もなく身体を寄せられていきます。

顔を上げれば彼のくちびる、下に向ければ胸の中で鼓動を感じ取れる位置に居ます。

「はう…。今の壮太くんの感じ、すごく好き。」

「なんだよ。普段はそんなに好きじゃないのか…？」

キスできるほどの至近距離から、残念そうに眉をハの字に描き口を尖らせて、寂しそうに笑う壮太くん。

「はううう…。そうじゃなくて。私がどんなに足掻いても離してくれないほど、想ってくれる人が好きなの。その…安心できるの。」

「そっか。だけど、ただのスケベかもしれないよ？」

「スケベでも良いの。縛られても、乱暴されても良いの。壮太くんになら、それでもいいの。」

「可愛いこと言ってくれるね。」

ツンツンとほっぺたを突かれます。

耳元で囁いたり、肩を抱き寄せられたり、お腹の辺りを突かれたり…。そんな一つ一つのスキンシップにドキドキさせられっぱなしでした。

……これからの時間は、壮太くと作りたい…。

きつと、壮太くんは私の話も理解してくれる…。

でも、私自身が覚悟を決めきれなくて気持ちにブレーキがかかり、その度にネガティブな感情に押し流されて言葉が詰まり涙が滲んできます。

「千草、大丈夫。」

「（…壮太くん…。）…うん。」

私は、温かい壮太くんの腕に抱かれ、私を取り巻く現実を話始めます。

「私、お母さんは話した通りだけど、お父さんからも必要とされてないの。一人目の子供は女の子がほしかつたし、お姉ちゃんもモデルをやっているだけあって凄くキレイ。やさしくて、両親の望んだ通りに成長してくれたから、両親共に満足している。だけど、二人目は男の子が欲しかったみたいで、そんな両親の間に私が生まれてきたから、私は要らない子なの。」

「それは、直接聞いた話？」

壮太くんの肩に寄り掛かりながら、過去を振り返り話し始めました。